

青年期女子学生の虐待された体験と心理社会的適応との関連

笠原 正洋・加藤 和生

Relation between Maltreated Experience and Psychosocial Adjustment of Youth Woman Student

KASAHARA, Masahiro · KATO, Kazuo

1. 問題と目的

専門家の目にはとまらない事例や通告されずに見逃されてきた児童虐待被害者の事例（これを「潜在的児童虐待被害者」と呼ぶ）においては、その被虐待経験と心理適応尺度（うつ、解離、自尊心）との間に関連性が認められるという報告がある（Kato, 2002；小田部・加藤, 2002）。また、加藤・大黒・笠原・後藤（2004）は、潜在的児童虐待被害者の心理適応状態を、専門機関に発見され措置された顕在的児童虐待被害者のそれと比較してみると、顕在的児童虐待被害者と同様に低い適応状態を示すことを報告しており、適切な治療を提供するためには、このような人たちを早期に発見していくことが必要だと主張した。

これらの研究で潜在的児童虐待被害者を同定するのに用いられた尺度は、大黒・加藤（2000, 2001）が開発した多重性児童虐待尺度である。このような被虐待体験を尋ねる自記式の尺度に対しては、回答者による記憶の歪曲が生じるため事実を反映していない、つまり信頼性に問題があるという批判がなされてきた（詳細なレビューは、Brewin, Bernice, & Gotlib (1993)）。しかし、この信頼性の問題を指摘する Brewinら（1993）の研究に対して、そのような指摘は行きすぎであることを示す研究がある。Paivio（2001）は、虐待の悩みを解決するために受けた心理療法によって、治療後に気分や症状が改善し、被虐待経験の意味づけが変化しても、治療の前後（6ヶ月後）に測定された虐待やネグレクトの回想的報告（The Childhood Trauma Questionnaire：CTQ (Bernstein et al., 1994)）は安定していることを示した。つまり回想記憶に

も信憑性があることが再確認されたとと言えるだろう。

このように回想的記憶が安定していることが指摘されたとしても、これは尺度構成の信頼性に関する問題であり、実際に被虐待経験を測定しているかどうか、つまり妥当性を保証するものではない。大黒・加藤（2000）の開発した尺度も真に被虐待を測定していたかどうかを確認していない。そこで、本研究では、この問題について、家族風土尺度（内田, 1989）の下位尺度である「家族尊重」、「家族満足感」、「対立的風土」の3因子を用いて、多重性児童虐待尺度の妥当性を検証する。虐待被害経験があるならば、お互いを尊重しない、家族が互いに支えあわないなどの否定的な家庭の雰囲気や家庭内にあったと予想される。そのため、多重性児童虐待尺度と「家族尊重」、「家族満足感」には負の相関が、その反対に、「対立的風土」には正相関が認められるだろう。

二つ目の課題は、潜在的児童虐待被害の心への影響の側面に関するものである。これまで潜在的虐待経験が及ぼす心理的適応上の問題のみが検討されてきた。しかし、現実には、対人行動面での適応と虐待被害経験とが関連すると予想されるものの、その関係は詳細には検討されていない（Higgins & McCabe, 2000, 2001）。たとえば、虐待被害者の複雑な PTSD を測定するための、構造化された面接 Structure Interview for Disorders of Extreme Stress (SIDES) の中に含まれる対人適応に関連する測定カテゴリーを見ると、「情動・衝動の調整不全」は、情動の調整不全、怒りの変調、自己破壊的行動、自殺念慮、性体験の変調、易刺激性に関する側面を測定

し、「対人関係」は、不信、人間関係の障害、虐待の再体験、他者への攻撃・虐待に関する側面を測定していることがわかる (Pelcovitz, van der Kolk, Roth, Mandel, Kaplan, & Resick, 1997)。つまり、衝動的、攻撃的な対人関係上の問題、すなわち反社会的な側面の測定に偏っており、対人場面において必要以上に大人びて振る舞う偽成熟性 pseudo-maturity や他者の反応をうかがい自己を抑制するような対人適応上の抑制的問題 (西澤, 1994) を詳細に検討していない。そこで、本研究では、前者の衝動的、攻撃的な問題を、感情をコントロールできずに人と衝突を繰り返すなど対人面で感情を適切に制御できない傾向、すなわち感情制御困難傾向として、また後者を、他者に迎合してしまい本心を言えないなど「イイ子」を振る舞ってストレスをためてしまう対人面の自己抑制傾向としてとらえ、多重性児童虐待体験との関連を検討する。あわせて、大黒・加藤 (2001) や Kato (2002) が用いた3つの心理適応尺度、自尊心、抑うつ、解離についても追試する。

なお、対人面の自己抑制傾向の測定については、宗像 (1995, 1996, 1998), 中川・宗像 (1989) が、自己抑制傾向尺度 (別名「イイ子尺度」) として尺度化を試み、実際に抑うつ傾向やバーンアウトと関連があることを報告している。宗像 (1995) によれば、イイ子とは、自分の感情を抑えてでも (自己抑制型行動特性) まわりの期待に添うように努力し、頑張る人のことを言う。そのため不快感、不安、不満などをもちやすい。そうした不満や不安などを感じやすい自分自身に対して、嫌悪感や無力感、自分らしさの喪失感を抱いて余計にストレス状態を増強している。その結果、神経症状、抑うつ症状、心身症状を最も生じやすい人たちである。そして、自己抑制をしてまでも、まわりの期待に応じようとする理由として、自分にとって重要な人に気に入られたい、認められたいという依存欲求が強いことを指摘していた。また、不安感が増すにもかかわらず依存欲求にこだわる理由

として、さまざまな生活の要請に自分自身で自立的に対処することに対して不安が強いことに起因している。誰か頼りになる人がいないと不安感が強まり、対処できない。生育史のなかで、いつもまわりの人に助けられてきたので、生活上の要請に対処していける自信 (対処自信感) がつくられず、自らの対処能力の不足をどこかで感じやすくなっているためストレス反応が生じやすいという。

しかし、宗像 (1995) はイイ子について上記のように述べているが、イイ子行動傾向を測定する尺度の検討については報告がない。そこで、この自己抑制行動傾向尺度の妥当性、信頼性については未検討であると考え、本研究では、新たに項目の収集を行い、尺度を再構成し直して、潜在的虐待被害と適応上の問題との関連を検討する。

2. 方法

2.1. 被験者

女子大学生、短大生296名 (平均19.6歳)。調査の依頼と実施にあたり、調査の趣旨や調査結果の利用法および人権への配慮については、口頭と文書によって十分に説明した。

2.2. 質問紙の構成

(1) 潜在的虐待被害経験…多重性児童虐待尺度59項目。大黒・加藤 (2000) が開発した尺度項目のうち性的虐待についての9項目を除外して用いた。「心理的虐待」20項目、「ネグレクト」13項目、「身体的虐待」26項目である。養育者からどれくらいよく (頻繁に) されたか、18歳までの体験を回想してもらい回答を求めた。評定は、1 (全くされなかった) ~ 4 (頻繁にされた) の4件法である。

(2) 家族の雰囲気…家族風土スケール80項目 (内田, 1989) の3因子「個人尊重的雰囲気」、「家族満足性」、「対立的雰囲気」それぞれについて6項目、計18項目、表現を一部修正して用いた。この項目は、小学生高学年まで家庭の中

にどのような雰囲気があったかを測定する尺度である。18歳までを回想させて回答させた。評定の仕方は、1（まったくあてはまらない）～4（どちらともいえない）～7（かなりあてはまる）の7件法である。

(3) 対人面での自己抑制傾向…まず宗像（1995）の尺度9項目を手がかりに、独自に26項目を作成し追加した。宗像では尺度の妥当性検証を行っていなかったため、新たに項目を追加する目的のため、A大学の学生（n=42）を対象に、イイ子の行動特性とイイ子に対するイメージを自由記述してもらい予備調査を実施した。その結果、「受容願望」のカテゴリと判断される9項目、「自己抑制」カテゴリに含まれる9項目、「期待に応える」カテゴリ7項目、「他者評価を気にする傾向」カテゴリ5項目、「察する能力」カテゴリ5項目が得られ、合計35項目を自己抑制行動傾向尺度とした。具体的な項目内容を表1に示す。

(4) 対人面での感情制御困難傾向…下坂・西田・齋藤・伊藤・神藤・柳原・鶴田・久木山・西田・西村・榎本・坂本・前川（2000）によりキレ行動と関連があると示された衝動性コントロール尺度8項目を反転して用いた。

(5) 心理適応1…ベックの作成した尺度21項目（林,1991）を用いた。

(6) 心理適応2…Bernstein & Putnam（1986）によるものを翻訳した解離尺度28項目（田辺,1995；田辺・小川,1992）を用いた。解離体験とは、記憶の脱落・現実感喪失体験・離人体験・同一性の変容感・苦痛の無視・没頭などの体験のことを言い、その体験をどれほど体験したことがあるかを測定する尺度である。最終的な質問項目は28項目であった。回答の仕方は、先行研究を参考に0「全く経験しない」から10「非常によく経験する」とし10件法で行った。

(7) 心理適応3…10項目からなる自尊心尺度（日本語版：山本・松井・山成,1982）を用いた。この尺度は、自分自身で自己に対する尊重や価値を評定する程度のことであり、山本らに

表1. 自己抑制型行動（イイ子）傾向尺度

(受容願望10項目)	
6	人から気に入られたいと思う方である。(M)
21	自分にとって重要な人には、自分のことを分かかってほしいと思う。(M)
25	人からほめられたいと思う方である。
1	自分のいい面を、誰にでも見せたいと思うほうである。
28	もっとまわりの人たちから認められたいと思っている。
13	自分の気持ちを相手に気づいてほしいと思うほうである。(M)
23	人からちょっとごとを言われたり、批判されたりすると悲しくなるほうである。
16	人から嫌われることをおそれる方である。
31	まわりの人から見捨てられるような不安を抱いている。(自己抑制9項目)
24	人を批判するのは悪いと感じる方である。(M)
18	自分の考えを通そうとするほうではない。(M)
3	辛いことがあっても我慢する方である。(M)
2	自分の感情を抑えてしまう方である。(M)
32	思っていることを安易に口に出せない。(M)
8	嫌なことを頼まれても断れない方である。
12	人には自分の本心を見せないようにしている。
34	友達を傷つけないように注意をはらっている。
30	人と意見が対立するのをおそれる方である。(期待に応える傾向7項目)
14	人の期待に添うよう努力する方である。(M)
27	まわりの人たちの期待にこたえようとする方である。
4	まわりの人たちと考えが違って自分も相手に合わせる方である。
33	大人の言うことはほとんど正しいと思っている。
10	どちらかというまわりの友だちに合わせようとしている。
19	友達と意見が違ったときに、自分の考えを通す方である。(－)
35	目上の人意見や考え方を優先する方である。(他者評価を気にする傾向5項目)
5	人の顔色や言動が気になる方である。(M)
26	自分の行動がまわりの人にどう思われるか気になる方である。
15	自分の行動が大人たちにどう思われているか気になる方である。
9	自分の行動が友達にどう思われているか気になる方である。
20	自分がどんなふうにかから判断されているのか気にする方である。(察する能力5項目)
17	人の考えていることが何となく分かるほうである。
7	人のちょっとした気分の変化でも敏感に感じてしまうほうである。
22	どうすれば相手の人に気に入られるか直感できるほうである。(M)
11	人の心の動きをよみとれる方である。
29	口に出して聞かなくても相手の気持ちを理解できるほうである。

(M)：宗像の項目 (－)：反転項目

より因子的妥当性は保証されている。7件法で行った。

3. 結果と考察

3.1. 尺度の整理

(1) 多重性児童虐待尺度…心理的虐待, 身体的虐待, ネグレクト, EDV (Exposure to Domestic Violence) ごとに経験頻度評定値を合算し, それをそれぞれの虐待スコアとした。

(2) 家族風土尺度…18項目に対して, 重みづけのない最小二乗法, プロマックス回転による因子分析を行った。固有値が第1因子から順に6.84, 1.74, 1.07, .79と推移していたため3因子解が適当であると判断した。そこで再度, 最小2乗法により3因子を抽出し, プロマックス回転を行った。項目の選択にあたっては, 因子負荷量がいずれかの因子に.40以上であること, 2つ以上の因子に負荷量が0.4以上高くないことという基準にしたがって行った。その結果, 最終的に14項目が残った(表2)。3因子による累積説明率は60.59%であった。

第1因子は, 家族成員がともに支えあう, 尊重しあうという項目が集まっていることから, 「家族尊重」因子($\alpha=.89$)と考えられる。また, 第2因子は家族に対する満足感を反映する項目が集まっていることから「家族満足感」

因子($\alpha=.87$), 第3因子は「対立的風土」($\alpha=.72$)であると考えられた。分析にあたっては各因子を構成する項目の合成平均値を用いた。

(3) 対人面の自己抑制行動傾向…自己抑制行動傾向尺度35項目に対して, 重みづけのない最小二乗法, プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の推移と解釈可能性を考慮して, 4因子解が適当であると判断した。そこで(1)と同様の手続きで項目を削除して再分析を行った結果, 最終的に19項目が残った(表3)。4因子による累積説明率は53.24%だった。第1因子から順に, 「受容願望($\alpha=.86$)」, 「察し(.85)」, 「他者への迎合(.76)」, 「自己抑制(.68)」と命名した。分析にあたっては各因子を構成する項目の合成平均値を用いた。

(4) キレ衝動傾向…項目-全体相関が.30未満の2項目を削除した。また因子分析を実施し, 因子負荷量が.40未満の2項目を削除し, 最終的に4項目($\alpha=.74$)を分析に用いた。「2. 私はだいたい穏やかな気持ちでいられる方である(反転)」 「6. 私はすぐ怒りやすい方である」 「9. 私は落ち着いた人間である(反転)」

表2. 家族風土尺度の因子分析結果

項目内容	F1	F2	F3
I 家族尊重 ($\alpha=.89$)			
4. 親たちが何か重大な決定をする前には子どもたちの意見もきいていた	.580		
7. 家族の誰かが個人的な問題を相談したときに, みんなが支えあっていた	.578		
10. 家族や家庭について何か重大な決定をするとき, みんなが発言できていた	.935		
13. 家族ひとりひとりの意見が, 尊重されるという雰囲気があった	.765		
14. どのようなことが起こっても, 家族のみんなを支え合ってやりとおすことができた	.606	.309	
16. 家庭に何か問題があったとき, みんなが発言できる雰囲気があった	.917		
II 家族満足感 ($\alpha=.87$)			
2. 私たち家族は一緒にいる時, 幸せであると思っていた		.764	
5. 私は, 自分の家庭が一番だと思っていた		.924	
8. 家庭の雰囲気は, 温かさにあふれていた		.725	
17. 私たち家族の雰囲気は私にとって満足できるものだった		.695	
18. 私たちの家族は, お互いを責めるということがほとんどなかった		.466	
III 対立的風土 ($\alpha=.72$)			
6. 親たちは, 何事も暴力や力で解決しようとしていた			-.637
9. 私の親たちは, 意見が合わないと怒って物を投げたり, 壊したりすることがあった			-.859
12. 私の親たちには, となりあたり, けんかをするなどの多くのめごとがあった		.300	-.551
因子間相関	F2	.715	
	F3	-.324	-.442
因子寄与率 (%)		46.39	9.13
			5.07

(重みづけのない最小二乗法, プロマックス回転)

表3. 自己抑制型行動傾向尺度の因子分析結果

項目	F1	F2	F3	F4	
I 受容願望 (α=.87)					
6. 人から気に入られたいと思う方である	.673				
9. 自分の行動が友達にどう思われているか気になる方である	.723				
16. 人から嫌われることをおそれる方である	.821				
20. 自分がどんなふうにも人から判断されているのか気にする方である	.807				
23. 人からちょっとこごとを言われたり、批判されたりすると悲しくなる方である	.505				
26. 自分の行動がまわりの人にどう思われるか気になる方である	.753				
28. もっとまわりの人たちから認められたいと思っている	.542				
31. まわりの人から見捨てられるような不安を抱いている	.584				
II 察しの能力 (α=.85)					
7. 人のちょっとした気分の変化でも敏感に感じてしまう方である		.575			
11. 人の心の動きをよみとれる方である		.886			
17. 人の考えていることが何となく分かる方である		.839			
29. 口に出して聞かなくても相手の気持ちを理解できる方である		.740			
III 他者への迎合 (α=.76)					
14. 人の期待に添うよう努力する方である			.802		
15. 自分の行動が大人たちにどう思われているか気になる方である			.579		
27. まわりの人たちの期待にこたえようとする方である			.759		
35. 目上の人の意見や考え方を優先する方である			.519		
IV 自己抑制 (α=.68)					
4. まわりの人たちと考えが違ってても自分が相手に合わせる方である				.702	
8. 嫌なことを頼まれても断れない方である				.554	
18. 自分の考えを通そうとする方ではない				.603	
因子間相関					
	F2	.187			
	F3	.572	.252		
	F4	.362	.144	.345	
因子寄与率(%)					
		30.54	11.80	6.11	4.79

(重みづけのない最小二乗法, プロマックス回転)

「17. 私はいつも自分自身の感情をコントロールすることができる (反転)」である。分析にあたっては項目の合成平均値を用いた。

(5) うつ尺度…21項目の評定値を単純に合算し、それをうつ尺度スコアとした。

(6) 解離尺度…28項目の合成平均値を分析に用いた。

(7) 自尊心…分析にあたっては項目の合成平均値を用いた。

3.2. 自己抑制型行動傾向尺度の妥当性の検討

宗像 (1995) にもとづくならば自己抑制型行動傾向の高い人は、次のような特徴を示すと考えられる。まず、受容願望があるため他者に迎合する傾向や、他人からの評価を恐れて自分の気持ちや行動を抑制する傾向にあるのは、その行動の背後に「自信のなさ」や「抑うつ感」があるためであると予想される。しかし、「イイ

子」が問題を起こすという例もあるように、そのような対人行動パターンをとることが心理的負担をもたらし、否定的な感情を衝動的に解消しようとする傾向や解離傾向が生じると予想される。したがって、以下の仮説が導かれ

表4. 自己抑制型行動傾向尺度と他尺度との相関

	自己抑制的行動 (イイ子) 傾向尺度			
	受容願望	察し能力	他者迎合	自己抑制
自尊心	.00	.05	.02	.01
キレ衝動	.15**	-.04	-.06	-.15**
ベックうつ	.28**	.09	.15**	.21**
解離(DES)	.12*	.18**	.09	.09

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

表5. 多重性児童虐待尺度と家族風土尺度との相関

	心理的虐待	身体的虐待	ネグレクト	EDV
家族風土尺度				
家族尊重	-.45***	-.30***	-.20**	-.36***
家族満足感	-.52***	-.37***	-.25***	-.48***
対立的風土	.45***	.48***	.23***	.63***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

青年期女子学生の虐待された体験と心理社会的適応との関連

表6. 4種類の被虐待の経験者 (%)

児童虐待のタイプ		被虐待経験なし		被虐待経験あり		
重篤度	虐待項目	評定 0=(まったくない) n (%)	合成評定値 n (%)	頻度評定毎の頻度(%)：1-3評定値		
				1=(ほとんどなし) n (%)	2=(ときどき) n (%)	3=(しばしば) n (%)
心理的虐待						
WHO主	1 私を塾や習いごとに通わせ、ほとんど遊ばせてくれなかった	155 (52.2)	142 (47.8)	88 (29.6)	47 (15.8)	7 (2.4)
張の虐待	2 学校でよい成績をとったりほめられるようなことがあっても、ほめたりしてもらえなかった	199 (67.2)	97 (32.7)	59 (19.9)	25 (8.4)	13 (4.4)
	3 学校でよいことがあって話しても、一緒に喜んでくれなかった	218 (73.4)	79 (26.6)	50 (16.8)	17 (5.7)	12 (4.0)
軽度	4 甘えようとしても甘えさせてもらえなかった	187 (63.4)	108 (36.4)	73 (24.6)	26 (8.8)	9 (3.0)
	5 私は悪くないのに、過度に厳しく非難されたり、とがめられた	199 (67.2)	97 (32.7)	55 (18.5)	34 (11.4)	8 (2.7)
	6 私のことを怒ると、急にだまりこみ、私を完全に無視した	227 (76.7)	69 (23.2)	36 (12.1)	24 (8.1)	9 (3.0)
	7 私が落ち込んでいるとき、声をかけてくれたり、なぐさめたり、話を聞いてくれたりしなかった	210 (71.2)	85 (28.6)	60 (20.2)	16 (5.4)	9 (3.0)
	8 可愛がってくれなかった	228 (77.3)	67 (22.6)	49 (16.5)	10 (3.4)	8 (2.7)
中度	9 つらくあたられた	213 (72.0)	83 (27.9)	43 (14.5)	36 (12.1)	4 (1.3)
	10 兄弟姉妹やよその子と比較して、「お前は、どうしていつもダメなの」と言われた	223 (75.3)	73 (24.6)	53 (17.8)	15 (5.1)	5 (1.7)
	11 私が劣等感を感じるようなことをわざと言われた (例えば、「お前はバカだ」「どうしようもない子だねえ」「ブタ!」など)	230 (77.7)	66 (22.2)	29 (9.8)	29 (9.8)	8 (2.7)
	12 よその人の前で、私の知られたくないようなことや秘密を平気で話してしまい、恥ずかしい思いをさせられた	191 (64.5)	105 (35.4)	57 (19.2)	36 (12.1)	12 (4.0)
	13 私が言うことをきかなかったり悪いことをしたとき、「言うことをきかないなら、もう出て行ってしまっからね」ときつく言われた	204 (68.9)	92 (31.0)	58 (19.5)	21 (7.1)	13 (4.4)
	14 私が言うことをきかなかったり悪いことをしたとき、「お前なんかはうちの子じゃない。出て行きなさい」と言われた	199 (67.2)	97 (32.7)	53 (17.8)	37 (12.5)	7 (2.4)
重度	15 怒って私を叱るとき、「そんなに迷惑をかけるのなら、自殺するからね」とか「病気になるって死んでしまうからね」と言った	273 (92.2)	23 (7.7)	12 (4.0)	9 (3.0)	2 (0.7)
	16 「お前なんか、生まれなけりゃよかった」と言われた	279 (94.3)	17 (5.7)	8 (2.7)	5 (1.7)	4 (1.3)
	17 拒絶されたり嫌われたりするのではないかと思っていた	224 (75.7)	72 (24.2)	48 (16.2)	15 (5.1)	9 (3.0)
身体的虐待						
軽度	1 せまくて暗い場所に閉じ込められた (例えば、押し入れ)	256 (86.5)	40 (13.5)	19 (6.4)	18 (6.1)	3 (1.0)
	2 夜、外に締め出され、そこで寝なければならなかった	279 (94.3)	17 (5.7)	10 (3.4)	7 (2.4)	0
	3 罰として丸1日何も食べさせてもらえなかった	293 (99.0)	3 (1.0)	3 (1.0)	0	0
	4 平手でたたかれた	162 (54.7)	134 (45.1)	65 (21.9)	49 (16.5)	20 (6.7)
	5 つねられた	228 (77.0)	68 (22.9)	46 (15.5)	16 (5.4)	6 (2.0)
	6 髪の毛をひっぱられた	253 (85.5)	43 (14.5)	29 (9.8)	9 (3.0)	5 (1.7)
中度	7 こぶしで殴られた	266 (90.2)	29 (9.8)	17 (5.7)	7 (2.4)	5 (1.7)
	8 ひざで蹴られたり、ひじ打ちされたりした	278 (93.9)	18 (6.1)	9 (3.0)	6 (2.0)	3 (1.0)
	9 足で蹴られたり、踏みつけられた	262 (88.5)	34 (11.4)	19 (6.4)	12 (4.0)	3 (1.0)
	10 先が平たくなっているものでたたかれた (例えば、物差し、布団たたき、ほうきなど)	247 (83.4)	49 (16.5)	28 (9.4)	16 (5.4)	5 (1.7)
	11 ベルトやコード、むちのような長いものでたたかれた	287 (97.0)	9 (3.0)	6 (2.0)	2 (0.7)	1 (0.3)
	12 お灸 (きゅう) をすえられた (治療の目的ではなく、お仕置きのため)	291 (98.3)	5 (1.7)	2 (0.7)	3 (1.0)	0
重度	13 当たったらがをするようなものを投げつけられた	270 (91.2)	26 (8.8)	18 (6.1)	5 (1.7)	3 (1.0)
	14 棒のようなものでたたかれた (例えば、金属バット、木刀、竹刀など)	286 (96.6)	10 (3.4)	7 (2.4)	2 (0.7)	1 (0.3)
	15 カベや床にたたきつけられた	284 (95.9)	12 (4.0)	7 (2.4)	4 (1.3)	1 (0.3)
	16 熱湯または冷水をぶっかけられた	294 (99.3)	2 (0.7)	1 (0.3)	1 (0.3)	0
	17 私をたたいたり蹴ったりして、私が痛がったり苦しんだりしているのを見て楽しんだ	294 (99.7)	1 (0.3)	1 (0.3)	0	0
	18 馬乗りになって殴られた	295 (99.7)	1 (0.3)	1 (0.3)	0	0
	19 布団に押し込められて、ひもでぐるぐる巻きにされた	295 (99.7)	1 (0.3)	1 (0.3)	0	0
	20 高いところから突き落とされた (例えば、階段の上から)	295 (99.7)	1 (0.3)	1 (0.3)	0	0
	21 明らかに食べられないものを、むりやり口の中に入れてくれた (例：置物、排泄物など)	294 (99.3)	2 (0.7)	2 (0.7)	0	0
	22 体に害があるものを飲ませられた (例えば、洗剤・殺虫剤など)	295 (99.7)	1 (0.3)	1 (0.3)	0	0
	23 ローソクのロウをたらされた	295 (99.7)	1 (0.3)	1 (0.3)	0	0
	24 刃物をちらつかせて言うことを聞かせようとした	294 (99.3)	2 (0.7)	2 (0.7)	0	0
	25 火のついたタバコや線香、マッチなどを私の体に押しつけられた	295 (99.7)	1 (0.3)	1 (0.3)	0	0
	26 熱したアイロンを押し当てられた	296 (100)	0	0	0	0
	27 首を絞められた	290 (98.0)	6 (2.0)	6 (2.0)	0	0
	28 刃物を突きつけられた、あるいは実際に切られた (例えば、ナイフ、カッター、包丁など)	296 (100)	0	0	0	0
	29 先のとがったもので刺された (例えば、針、釘、千枚通しなど)	294 (99.7)	1 (0.3)	1 (0.3)	0	0
ネグレクト						
中度	1 小さい頃、家の中に一日中ひとりぼっちで置き去りにされた	250 (84.5)	46 (15.5)	32 (10.8)	10 (3.4)	4 (1.3)
	2 病気などの正当な理由もないのに、学校へ通わせてくれなかった	292 (98.6)	4 (1.3)	3 (1.0)	1 (0.3)	0
	3 ケガや病気をしてもほったらかしにされていた	283 (95.6)	13 (4.4)	9 (3.0)	4 (1.3)	0
	4 私が小さい頃は、食事やお弁当の準備もしてもらえなかったし、大きくなってからも食事代や食事の材料を用意してもらえなかった	286 (96.6)	10 (3.4)	8 (2.7)	2 (0.7)	0
	5 小さい頃、衛生面に気を配ってくれなかった (例えば、そうじ・洗濯をしない、風呂に入れてくれない、など)	290 (98.0)	6 (2.0)	3 (1.0)	3 (1.0)	0
	6 小さい頃、(養育者(たち)が)用事をしている間中、私は車の中にほったらかしにされていた	284 (95.9)	12 (4.0)	8 (2.7)	3 (1.0)	1 (0.3)
重度	7 正当な理由もなく、長い間家の中に閉じこめられ、他の人と会えないようにされた	291 (98.3)	5 (1.7)	3 (1.0)	2 (0.7)	0
	8 私がひとりで帰って来れないようなところへわざと連れて行かれ、置き去りにされた	291 (98.3)	5 (1.7)	4 (1.3)	1 (0.3)	0
	9 奴隷や召使いのようにこき使われた	288 (97.3)	8 (2.7)	5 (1.7)	3 (1.0)	0
	10 寝るとき、寝具を与えてもらえなかった (例えば、ベッドや布団)	294 (99.3)	2 (0.7)	0 (0)	2 (0.7)	0
EDV						
中度	1 「(養育者たちが) またひどい口ゲンカを始めるのではないか」と思っていた	204 (68.9)	92 (31.0)	43 (14.5)	28 (9.4)	21 (7.1)
重度	2 (養育者たちは) 仲が悪く、別れてしまうのではないかと思っていた	205 (69.7)	89 (30.0)	49 (16.5)	23 (7.7)	17 (5.7)
	3 (養育者たちは) 私がしている前で平気で殴り合いのケンカをした	271 (92.5)	22 (7.4)	13 (4.4)	6 (2.0)	3 (1.0)

る。自己抑制型行動傾向の高い人は、①自尊心が低く、②キレ衝動、③抑うつ感、及び④解離傾向が強いだらう。この仮説を検証するために、自己抑制型行動傾向の各下位尺度得点と自尊心、抑うつ、キレ衝動、解離との相関を求めた(表4)。その結果、受容願望尺度は、自尊心とは無相関だったが仮説通りの結果が得られた。察し能力尺度は解離尺度、他者迎合尺度は抑うつ尺度とのみ関連が認められた。また自己抑制尺度はキレ衝動が低く抑うつが高いという結果が得られた。受容願望尺度のみ妥当性が確認された。自己抑制とキレ衝動の負の相関は、まだ抑制によって欲求不満の状態になるまでに至っておらず抑制傾向が持続していることを反映していた可能性が考えられる。これらの点については今後も自己抑制型行動傾向の理論モデルの再修正も含めて今後も詳細に検討する必要がある。

3.3. 多重性児童虐待尺度の妥当性の検討

多重性児童虐待尺度と「家族尊重」,「家族満足感」には負の相関が、その反対に、「対立的風土」には正相関が認められると予想される。この点を検証するために、心理的虐待、身体的虐待、ネグレクト、EDV (Exposure to Domestic Violence) の虐待スコアと家族風土の3因子の尺度得点との相関を求めた(表5)。その結果、予想された方向での有意な相関が認められ、多重性児童虐待尺度の妥当性が確認されたといえる。

3.4. 潜在的児童虐待被害の経験者数

(1) 4種類の虐待の被害者数

4種類の被虐待の項目内容毎の被虐待経験者数を表6に示した。表中の重篤度(軽度, 中度, 重度)の区別は, 虐待問題に詳しい研究者, 精神科医, 大学院生それぞれ1名ずつの協議による。また, 重篤度別の人数は表7に示した。心理的虐待を経験した割合が81.1%と一番高い。次に, 身体的虐待の63.2%, EDVの39.9%,

表7. 重篤度別にみた経験者数

	軽度	中度	重度	n	(%)	
心理的虐待	○			55	(18.6)	
		○		18	(6.1)	
			○	1	(0.3)	
	○	○		85	(28.7)	
	○		○	2	(0.7)	
		○	○	2	(0.7)	
	○	○	○	77	(26.0)	
	虐待経験者				240	(81.1)
	軽度まで				55	(18.6)
	中度まで				103	(34.8)
重度				82	(27.7)	
非経験者				56	(18.9)	
身体的虐待	○			62	(20.9)	
		○		7	(2.4)	
			○	17	(5.7)	
	○	○		36	(12.2)	
	○		○	29	(9.8)	
		○	○	3	(1.0)	
	○	○	○	33	(11.1)	
	虐待経験者				187	(63.2)
	軽度まで				62	(20.9)
	中度まで				43	(14.5)
重度				82	(27.7)	
非経験者				109	(36.8)	
ネグレクト		○		52	(17.6)	
			○	2	(0.7)	
		○	○	8	(2.7)	
	虐待経験者				62	(20.9)
	中度まで				52	(17.6)
重度				10	(3.4)	
非経験者				234	(79.1)	
EDV		○		28	(9.5)	
			○	26	(8.8)	
	○	○		64	(21.6)	
	虐待経験者				118	(39.9)
	中度まで				28	(9.5)
重度				90	(30.4)	
非経験者				178	(60.1)	

ネグレクトの20.9%と続く。これらの割合は、大黒・加藤(2000,2001)の調査とほぼ同じであると考えられた。

(2) 多重性児童虐待の被害者数

一人の人は何種類の被虐待を経験したか、すなわち1種類に留まった単一性児童虐待と複数の種類を経験した多重性児童虐待の被害者数を求めた(表8)。約25%が単一性児童虐待の被害を受けており、64%が多重性児童虐待被害者であった。この結果は、Higgins & McCabe(2000, 2001)やKato(2002)が指摘しているように、現実には単一性虐待よりも多重性虐待が生じていることを裏付けている。ちなみに虐待被害を

表 8. 単一性・多重性被虐待経験者数 (%)

心理	身体	ネグレクト	EDV	人数	小計	(%)
単一性被虐待経験者						
○				55		
	○			12		
		○		1		
			○	7	75	(25.3)
多重性被虐待経験者						
○	○			64		
	○	○		0		
		○	○	0		
○			○	10		
○		○		3		
	○		○	5	82	(27.7)
○	○	○		12		
	○	○	○	0		
○		○	○	2		
○	○		○	50	64	(21.6)
○	○	○	○	44	44	(14.9)
被虐待経験なし				31		(10.5)
					296	

受けていない者は10.5%に過ぎなかった。

3.5. 潜在的児童虐待被害経験と対人面・心理面の適応尺度との関連

(1) 記述統計

被虐待の種類別に、被虐待経験あり群となし群とに分け、対人面・心理面の適応を測定する尺度の記述統計(平均値およびSD)を表9に掲載した。群間差をt検定により検討したところ、抑うつと解離においては、自尊心尺度を除いて、すべての虐待の種類で被虐待経験あり群の方が有意に高いことが示された。また自己抑制型行動傾向には、一部に群間差が認められた。表10には、心理社会的適応尺度との相関を

提示した。対人適応面での自己抑制型行動傾向の下位尺度である受容願望と、心理的虐待、身体的虐待およびEDVとの間には正相関が認められた。また、自己抑制と心理的虐待にもわずかな正相関が認められた。一方、対人適応面のキレ衝動尺度においても心理的虐待とEDVに正相関が認められた。抑うつ、解離と被虐待経験との相関を見てみると、すべての虐待において正相関が認められた。この結果は大黒・加藤(2001)、Kato(2002)の結果を支持していた。しかし自尊心との間に有意な相関が認められなかった。

(2) 心への影響(階層的重回帰分析)

適応状態が過去のどのような被虐待体験により影響を受けているのかを検討するために、虐待の種類毎の虐待スコアを説明変数として、各適応尺度(自己抑制型行動傾向尺度の4つの下位尺度、キレ衝動、自尊心、抑うつ、自尊心)を目的変数とする重回帰分析を実施した。なお、分析にあたっては、被虐待という事実がなくても家族内に尊敬し支え合うことが少ないという否定的な家庭風土が適応状態を悪化させる影響を与える可能性もあるため、階層的重回帰分析を用いて、まずステップ1で適応尺度に及ぼす家族内風土の影響を検討し、ステップ2で家族内風土と被虐待経験という要因を同時に投入して分析した。これにより適応尺度スコアの変動が家族風土によるものか被虐待経験によるものを解釈することが容易になると考えられ

表 9. 虐待の種類毎にみた被虐待経験の有無別の測定尺度平均値(標準偏差)

	心理的虐待		身体的虐待		ネグレクト		EDV	
	被虐待経験あり n=240(81.1%)	被虐待経験なし n=56(18.9%)	被虐待経験あり n=187(63.2%)	被虐待経験なし n=109(36.8%)	被虐待経験あり n=62(20.9%)	被虐待経験なし n=234(79.1%)	被虐待経験あり n=118(39.9%)	被虐待経験なし n=178(60.1%)
自己抑制型行動傾向								
受容願望	5.26(0.99)	5.14(1.07)	5.31(0.98)	5.11(1.03)	5.31(1.08)	5.23(0.99)	5.37(1.02)	5.15(0.99) †
察し能力	4.70(1.13)	4.73(1.07)	4.79(1.09)	4.56(1.16) †	4.82(1.14)	4.68(1.12)	4.83(1.01)	4.63(1.18)
他者への迎合	4.76(1.09)	4.71(0.96)	4.81(1.04)	4.65(1.10)	4.85(1.10)	4.72(1.06)	4.77(1.06)	4.74(1.07)
自己抑制	4.53(1.06)	4.45(1.14)	4.54(1.12)	4.48(1.12)	4.80(1.22)	4.44(1.08) *	4.61(1.11)	4.46(1.11)
キレ衝動	4.04(1.18)	3.85(1.10)	4.06(1.14)	3.91(1.20)	4.26(1.11)	3.76(1.17) †	4.19(1.22)	3.89(1.11) *
自尊心	3.73(1.05)	3.88(1.09)	3.69(1.07)	3.88(1.03)	3.77(1.14)	3.76(1.03)	3.67(1.08)	3.82(1.05)
ベックうつ	12.58(8.05)	9.04(6.01) **	12.66(8.21)	10.63(6.94) *	15.98(8.70)	10.83(7.21) ***	13.84(7.97)	10.63(7.47) **
解離体験(DES)	2.19(1.63)	1.28(1.01) ***	2.34(1.66)	1.46(1.20) ***	3.03(1.83)	1.75(1.37) ***	2.47(1.68)	1.72(1.42) ***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

表10. 心理社会的適応尺度と虐待スコアとの相関

	心理的虐待	身体的虐待	ネグレクト	EDV
自己抑制型行動傾向				
受容願望	.141*	.121*	-.048	.123*
察しの能力	.025	.034	.024	.026
他者への迎合	.061	.080	-.002	.059
自己抑制	.130*	.050	.083	.017
自尊心尺度	-.035	-.064	-.024	-.076
キレ衝動	.104†	.061	.012	.182**
ベックうつ	.371***	.315***	.142*	.272***
解離体験 (DES)	.342***	.291***	.249***	.219***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

る。分析結果を表11に示す。対人面の自己抑制型行動傾向尺度の受容願望を、被虐待体験を含むモデルが有意に説明していた ($F_{(7,283)} = 2.31$, $p < .05$)。心理的虐待 ($\beta = .145$, $p < .10$) と EDV ($\beta = .150$, $p < .10$) が受容願望を強める傾向があり、ネグレクト ($\beta = -.128$, $p < .05$) と対立的風土変数 ($\beta = -.140$, $p < .10$) が弱める影響を与えていた。他者への迎合についても被虐待体験を含むモデルが影響を与える傾向が認められた ($F_{(7,288)} = 1.99$, $p < .10$)。EDV が他者への迎合を強める傾向があった ($\beta = .148$, $p < .10$)。自己抑制型行動傾向尺度の残りの下位尺度、察する能力と自己抑制には説明変数の有意な影響は認められなかった。一方、対人適応面のキレ衝動については、被虐待体験を含むモデルが有意に説明していた ($F_{(7,288)} = 12.75$, $p < .01$) が、被虐待体験を投入したステップ2での変化量は有意ではなかった。

EDV がキレ衝動を強める傾向が認められた ($\beta = .145$, $p < .10$)。一方、心理適応面への影響では、まず、ベックのうつ尺度に対しては、家族風土による影響も認められた ($F_{(3,292)} = 11.08$, $p < .001$) が、被虐待経験を投入したステップ2の変化量も有意に増加していた (Δ

$R^2 = .07$, $F_{(4,288)} = 6.08$, $p < .001$)。心理的虐待が有意に抑うつを強め ($\beta = .207$, $p < .05$)、身体的虐待が強める傾向があった ($\beta = .139$, $p < .10$)。また、解離についても被虐待経験を付加したステップ2での説明率変化量も有意に増加している ($\Delta R^2 = .07$, $F_{(4,288)} = 6.15$, $p < .001$)。心理的虐待が有意に解離を強め ($\beta = .209$, $p < .01$)、ネグレクトも解離を有意に強めていた ($\beta = .124$, $p < .05$)。自尊心尺度には説明変数の有意な影響は認められなかった。

次に、被虐待体験による影響が認められた5つの尺度、すなわち受容願望、他者への迎合、キレ衝動、抑うつ、解離に対して、被虐待経験の重度による影響を検討してみた。具体的にはステップ2で投入する被虐待経験の変数を重度別に設定して分析を行った。その結果を表12に示す。受容願望を目的変数とした場合 ($F_{(12,283)}$

表11. 家族風土と児童虐待被害から適応指標を予測する階層的重回帰分析結果

	受容願望		他者への迎合		キレ衝動		ベックうつ		解離 (DES)	
	標準偏回帰係数 (β)		標準偏回帰係数 (β)		標準偏回帰係数 (β)		標準偏回帰係数 (β)		標準偏回帰係数 (β)	
	step 1	step 2	step 1	step 2	step 1	step 2	step 1	step 2	step 1	step 2
家族尊重	.020	.055	.050	.082	-.095	-.097	-.175*	-.123	-.103	-.054
家族満足	-.057	.010	.061	.130	-.138	-.123	-.109	-.015	-.022	.065
対立風土	0	-.140†	.054	-.129	.012	-.041	.108†	-.052	.212**	.105
心理的虐待		.145†		.097		-.027		.207*		.209**
身体的虐待		.103		.105		-.022		.139†		.075
ネグレクト		-.128*		-.032		-.043		-.025		.124*
EDV		.150†		.148†		.145†		.097		.001
R	.046	.231*	.099	.215†	.222**	.250**	.320**	.415**	.276**	.386**
R ²	.002	.053	.010	.046	.049	.063	.102	.172	.076	.149
ΔR^2		.051**		.036*		.013 ns		.070**		.073**

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

表12. 家族背景と児童虐待被害（重度別）から適応指標を予測する階層的重回帰分析結果

	受容願望		他者への迎合		キレ衝動		ベックうつ		解離 (DES)	
	標準偏回帰係数(β)		標準偏回帰係数(β)		標準偏回帰係数(β)		標準偏回帰係数(β)		標準偏回帰係数(β)	
	step 1	step 2	step 1	step 2	step 1	step 2	step 1	step 2	step 1	step 2
家族尊重	.020	.055	.050	.090	-.095	-.102	-.175*	-.107	-.103	-.046
家族満足	-.057	.021	.061	.132	-.138	-.121	-.109	-.017	-.022	.064
対立風土	.000	-.132	.011	-.085	.012	-.021	.108†	-.006	.212**	.160*
心理的虐待 軽度		-.030		-.025		-.113		.041		-.011
中度		.075		-.050		.088		.073		.130
重度		.166*		.249**		.013		.151*		.158*
身体的虐待 軽度		.051		.086		.029		.041		.067
中度		.046		-.011		-.067		-.066		-.125
重度		-.014		.031		-.026		.252**		.166*
ネグレクト		-.134*		-.075		-.044		-.084		.071
EDFV 中度		.161†		.003		-.013		.079		-.067
重度		.011		.147†		.154†		.005		.039
<i>R</i>	.046	.270*	.099	.279*	.222**	.271*	.320**	.464**	.276**	.426**
<i>R</i> ²	.002	.073	.010	.078	.049	.074	.102	.215	.076	.181
ΔR^2		.071*		.068*		.025 _{ns}		.113**		.105**

† $p < .10$. * $p < .05$. ** $p < .01$.

=1.85, $p < .05$), 心理的虐待の重度 ($\beta = .166$, $p < .05$) と EDV の中度 ($\beta = .161$, $p < .10$) が受容願望を強め、ネグレクトは抑制していた ($\beta = -.134$, $p < .05$)。また、他者への迎合 ($F_{(12,283)} = 1.99$, $p < .05$) では、心理的虐待の重度 ($\beta = .249$, $p < .01$) および EDV の重度 ($\beta = .147$, $p < .10$) が強めていた。キレ衝動 ($F_{(12,283)} = 1.87$, $p < .05$) は、EDV の重度が影響していた ($\beta = .154$, $p < .10$)。一方、心理適応面では、抑うつにおいてはステップ1において家族風土の家族尊重と対立的風土が抑うつを有意に説明していた ($F_{(3,292)} = 11.08$, $p < .001$) が、虐待を付加したステップ2では、抑うつは家族風土の変数に影響されるのではなく、心理的虐待の重度 ($\beta = .151$, $p < .05$) と身体的虐待の重度 ($\beta = .252$, $p < .01$) の影響を受けていた ($F_{(12,283)} = 6.45$, $p < .001$)。解離においては家族風土尺度の中の対立的風土の影響 ($\beta = .160$, $p < .05$) は認められるが、心理的虐待と重度 ($\beta = .158$, $p < .05$) の身体的虐待 ($\beta = .166$, $p < .05$) が影響していた ($F_{(12,283)} = 5.22$, $p < .001$)。

3.6. 本研究のまとめと今後の課題

本研究の目的は、潜在的児童虐待被害の心理社会的適応面への長期的影響を検討することであった。研究にあたって、まず加藤らが開発した多重性児童虐待尺度の妥当性検証を行った。そして、対人面の適応問題を測定するための自己抑制型行動傾向尺度の妥当性検証を行った上で上記の目的を検討した。この対人面への影響については、従来から、被虐待経験と対人適応上の問題とが関連すると指摘されていた。しかし、その検討は反社会的な対人行動面に偏っていたきらいがある。本研究は、その側面に加えて対人面において他人に迎合し自己抑制するという自己抑制型行動傾向を用いて対人面への影響を詳細に検討した。

調査の結果、対人適応の自己抑制的な問題には心理的虐待がと EDV が影響を与えていること、また対人適応のキレ衝動には EDV が影響していた。また、心理適応面では、心理的虐待と身体的虐待が影響を与えていた。心理的虐待は対人適応面、心理適応面の両者に影響を与えていた。これまで、虐待の問題は生命への危険性から身体的虐待とネグレクトの予防に重点が置かれている。しかし、本研究から、心理的虐

待が適応面に重大な影響を及ぼす可能性があることを見いだすことができた。さらに、EDV (Exposure to Domestic Violence) が、対人適応面に影響する可能性も認められた。今後は、調査対象者を増やしてこの研究の知見を追試するとともに、潜在化していた心理的虐待やEDV、さらには身体的虐待が、どのようなメカニズムで対人面、心理面の適応につながるのか詳細に検討しなければならない。

引用文献

- Bernstein, D. P., Fink, L., Handlesman, L., Foote, J., Lovejoy, M., Wenzel, K., Sapareto, E., & Ruggiero, J. (1994). Initial reliability and validity of a new retrospective measure of child abuse and neglect. *American Journal of Psychiatry*, **151**, 1132-1136.
- Bernstein, E. M., & Putnam, F. W. (1986). Development, reliability, and validity of a dissociation scale. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, **174**(12), 727-35.
- Brewin, C. R., Bernice, A., & Gotlib, I. H. (1993). Psychopathology and early experience: A reappraisal of retrospective reports. *Psychological Bulletin*, **113**(1), 82-98.
- 林 潔. (1991). Beck Depression Inventory (1978年版) の検討と Depression と Self-efficacy との関連についての一考察. 白梅学園短期大学紀要, **27**, 43-52.
- Higgins, D. J., & McCabe, M. P. (2000). Relationship between different types of maltreatment during childhood and adjustment in adulthood. *Child Maltreatment*, **5**(3), 261-272.
- Higgins, D. J., & McCabe, M. P. (2001). The development of the comprehensive child maltreatment scales. *Journal of Family Studies*, **7**(1), 7-28.
- Kato, K. (2002). Multiple types of child-abuse experiences and psychological adjustment in Japan (interdependent culture). Poster presented at the 14th Annual Meeting of American Psychological Society, New Orleans, USA, 6/6-9.
- 加藤和生・大黒 剛・笠原正洋・後藤晶子. (2004). 潜在的虐待被害の実態. 教育心理学会第45回大会総会発表論文集, 80-81.
- 北村俊則・木島伸彦・相原和花・友田貴子・福田亮子・山本真規子. (1996). 児童期における被養育体験・被虐待体験・いじめられ体験が成人になってからの精神的健康に及ぼす影響. 研究助成論文集 (安田生命社会事業団), **32**, 119-125.
- 宗像恒次. (1995). ストレス解消学. 小学館ライブラリー, 284-300.
- 宗像恒次. (1996). ストレスの心理学—ストレスをためやすい子, そうでない子 (特集ストレスについて). 児童心理, **50**, 1-10.
- 宗像恒次. (1998). ストレスで「キレ」るイイ子の心の教育 (特集心の教育). 教育と医学, **46**, 314-322.
- 中川米造・宗像恒次. (1989). 医療・健康心理学. 28-30. 福村出版.
- 西澤 哲. (1994). 子どもへの心理的影響. 子どもの虐待: 子どもと家族への治療的アプローチ. 誠信書房.
- 大黒 剛・加藤和生. (2000). 潜在的に存在する被虐待児だった成人—児童虐待の実態調査. 九州心理学会第61回大会発表論文集, 69.
- 大黒 剛・加藤和生. (2001). 潜在的に存在する被虐待児だった成人(2)—多重虐待質問紙を用いた児童虐待被害者の実態調査. 九州心理学会第62回大会発表論文集, 48.
- 小田部貴子・加藤和生. (2003). 心の傷スキーマの実証的研究: Affective priming パラダイムを用いて. 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 264.
- Paivio, S. C. (2001). Stability of retrospective self-reports of child abuse and neglect before and after therapy for child abuse issues. *Child Abuse & Neglect*, **25**, 1053-1068.
- Pelcovitz, D., van der Kolk, B., Roth, S., Mandel, F., Kaplan, s., & Resick, P. (1997). Development of a criteria set and structured interview for disorders of extreme stress. *Journal of Traumatic Stress*, **10**, 3-16.
- 下坂 剛・西田祐紀子・齋藤誠一・伊藤崇達・神藤貴

昭・柳原利佳子・鶴田弘子・久木山健一・西田紀子・西村亜希子・榎本千春・坂本由佳・前川雅子。(2000). 現代少年の「キレル」ということに関する心理学研究(1)－キレ行動尺度作成およびSCTによる記述の分析－. 神戸大学発達科学部研究紀要, 7, 665-671.

田辺 肇.(1995). 解離性体験と心的外傷体験との関連－日本版DES (Dissociative Experiences Scale)の構成概念妥当性の検討. 催眠学研究, 39, 1-10.

田辺 肇・小川俊樹.(1992). 質問紙による解離性体験の測定－大学生を対象としたDES (Dissociative Experiences Scale)の検討. 筑波大学心理学研究, 14, 171-178.

内田利広.(1989). 家族風土スケールの作製とその適用の試み－家族メンバーの自己実現度と家族の雰囲気との関係. 人間性心理学研究, 6, 59-71.

山本真理子・松井豊・山成由紀子.(1982). 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究, 30, 64-68.

付記

調査実施にご理解, ご協力いただきました学生の皆さまに, たいへん感謝致します. 本研究は, 基盤研究(B2)「潜在的被虐待被害」の実態解明とそれが心に及ぼす影響に関する理論的・実証的研究(研究代表者:加藤和生, 平成13年度～15年度)により行われ, そのデータを再分析し, 加筆・修正したものである.